頃末
仁士
冥三
部作
特別
へ13
3633
45

へ13
3633
巻 45

昭和三十二年六月八日
宮川曼魚氏寄贈

序

孝行千賞を。不幸み受出さんか。
實ゑ川柳長井姉なる郎。虚と実とを
中御。面てふ通俗飯盛。意氣路を
磨く心の駒下沐。ゆなる風み八跪出し
褄の外八文字。姉も有り又聖人と

茶屋が軒端の燈灯の。其亂燭は
流れの泉。辛氣辛苦の苦悪さ。
たとへ一文が鉄瓶と買つても。豈
千金に尊しと称ん。てまんを管
のもつかとぷんを稚渡の音色を
聞つゝ。通ひ廊は裏茶樓もうぐ。
娼婆とはあだ宿と探つゝ。醇と
嘯りゝ梅暮里谷根子。嗚呼其
才は高くて。小道屎乃火見櫓
を足下に。俄笠頭の走り貧
南一の警駕を。ちん。不佞は書の
伴頭新道とゝ少。總菜は子供

嗚呼。屈の姫が序文を作。謹
でうけて。一すマアおもちゃと
さてはいふ。

于時寛政戊午春視初衣裳日
於喧囂樓上京はち息子

傾城買二筋道序

智者糸毛一質う禮ば愚者乃
一德あて加賀結の弱も薩摩
布の強もまるで姉の棚尻毛の
脊負ひ。利あ捨ぐ。捨ぐく

通子の云。遊治郎乃疵功は。
醜夫も溫柔ふを。猶及ざる
ごとしと。冥加なり。人を只
心農やはしきこゝを。なるけ
れとふ偽りなくと書事

忠こう里

千乃ちまき

梅暮里谷峨述

の史記
の南齋書
雪華画

目録

○夏の床
○冬の床
こしこの歌ふ
往来の紀美代
盡の事

谷嶽

傾城買二筋道

谷嶽作

○夏の床

世界八小見勢客ハ二十又六のそりぬの乃ゆ
きいろ男にて脇どころあきぼと已脇の赤至道
む地四り同前客ハ二十一二たいていちうり
くしくそのそぐうちまんさうでるなる紀四

五會め

水潤にて　合　夜半の短うちをよけれどもおりしかとの
りやもと
ごと涙の海しよ口でハ人どもんぞうの中と

(ぶら)(ん)なりきの垣根まとふくゝしいなの蚊乃声へ
とゝよりとろつて蠅の蚊と焼けやうれつゝ
氣同しとりどゝろの紀裏の床仕出 須衣
いたそぬしの声ハいきぶよ 五郎 声斗ぬめ
つときみやいとを絞てくるやア廣小路の十
哲のゝちでハ新測とふものゞゼ 内ナ なんのゝ
さへ 五郎 いやよ蚊でゝらだとゝふまよ 内ナ
ヨヤむがゝいちのゞね百さんとやゝとゝ声

ゞねなれもなんどとゝふのゝへ 内ナ おアよまつし
そふ声でき〳〵きゝれてハ百もゝゝ男ゞゞ 内ナ
そゝやアぬしゝゝのゝふよ入こんておいゞな
んすものとだれでもきゝぬとものハおゝせんのさ
おゝふさぬしもそこゝゝ中ゞゝゝどゞゞけと
ないきゝゝのはきさうんさゞきゞゞきんさもおお
いゞなんすとゝゝとそふハゝゝておきやそあん
ー 五郎 そんなよてまへよ氣とときもゝゝるのきねへ

うえ茶してこうかんよしごろハちりとうらどが
ちげくごをのうとうよ国へかいりとおくらの小どら
ひる鰹節をかでとくくえハねへら[illegible]や猫
じやひる鯨へーとうてんねへだちぶひうう
いすみへーてかんのかくさんく[illegible]ちんので
ねへといまころハおさくばあんぬせいすりだ
[illegible]ようむでいあんすロのちくとけねへいす
ふへひれさきおまこんのねをそうろロをいお

ふとおりりて[illegible]ひる只ハうとねへぐまねのちかい
くつご[illegible]ひてくこなんしー[illegible]ハまりのちかいろ
のくれくられて判ハたがしくさ[illegible]でへおむづうい
ねハイ十三で賣れて釈判さ[illegible]十三で賣れ
て釈判されバうとと拾ぐちう十三十四十五十六は
四年ハをあせ弱へうこせくみ十年ハ五年ぐ
鯨んぐーいあ女ぐろるぐ買ぐけねんうちい十
五年ち[illegible]そーとひてなんすとおりやア[illegible]ひろ

と氣のこしくとんさてかうりうださねけを
やァさんい所そりそれねまりそりちとむ
いてこそや 四十 ヨつちやァいや 四十一 痩地すして
殺うすく枕だこのいりこ処までよくくんで
廿三でいふ足なしおてまくよりきあきるわ
うがおそくよりぐ 四十二 むごひ事ばりいく
あんすわんきくしねゆ川よいくこ 四十三
なに源川よいくこどふりで 四十四 人がるいといきん

すのく 四十五 イャいさごとふよ 四十六 りのうを
ぐりうりゆんよりわとりわ客人ハさくしくり
わどんがきれるまくさんとうりわ客人ハ武蔵くんかんく
きれつてくこのごとかんぐーうそりまとかく 四十七 コラりちとまと
りのげてこや何くりのゼ 四十八 ヨつちやァいや 四十九
いやぎやァふそくちぐこと 五十 まりまちふ
んーぐいぬんこせくすぐ人の名をこくく時ハと
がなをなのるとういくすりくすりのぬーのよか

らうんをあんー[五ノ]それとおぼしるにおぼとく
らたとしさ[ハノト]きていやん[ヌノ]さあうやくおく
ぐんはいやうそんあやぶハなしごそこへゾうちやう
高麗[こうらい]やてむくあはどうさせさいのこれくふ
ふまあのゆをぞんぞうしみやや[ソヒノ]ゑんるの
さあうこいんーと[ぞんまとまうみやるハまんぞ]
こうまやうなんぶ貪[むさぼ]之寺の過去帳[そこをとう]ハなしごー
いをとうんてハ[ちゑ]三年の[こい]恋もさうあん[ヌノ]そしが

うり[ハノ]なぶ[ヌノ]きそこうはるうらおハま
ぶうろうものうろているんがはるふとありんぼ[ナノ]
うらあんをりあすうひはあやうたんぞあうしきすが
あうあうもぬーのんゾはしぶ[ぶ]でぞあうもーい
すのううぞうなんすなうあんでもいやう
まううきあくとううぞせあうぬーのかせう
ちなる客人[きやくじん]ハつき出しいやう[ナノ]ぞうかとが
とぬく客人とつき出あすあもなうまうまる抱[ゆ]

切餐切てさうてことは初りかハもうしぬすよ
そーてどすれバんがすくいとく
いちもんちやいすとい初りかんぐ
とかーてくるもやライびけくろもめ
へりりてくのかへ
りりもぐどふいふ弟ちろくでもぐちきねぐおれぐ
ちりて金くりりりりまつて遊びよきやーしね
へとんぐ図ハ火の車ぐられどよ者ぐ水車のふ

おロ車いまろうてりりに車ぐ板と初りくちりに了
簡もちろく来ちろ年ぐよぐよぐれ初れぐちりお
りちいとてお代袋と日子よとされ初へるあ
むよあも勤ぐくいハたりとするかくどでも
りちりぐそれどやまきりぐふぐんちれねと
いふりぐまちよ者もぐりりは紙ぐりちば
そのこのどと二三本かりてくるやちすと
やりおれもりりぐちに図ちでちとりふりぐ

まくらもとのふいきもすりぞうきうやすと
れるぞんじまつりてつるぶやせうちゃうのもとのよ
うな茶碗どもをつけてこうてとうてこうあ
とてこうるのハねつまるまきおれよかうぞ
ゑ前のよがゝとおりかさやくハちろとハ地切と
きゝぬけうくゝあるゝ神へそれもいうきまれ
そのハ借物あゝいりすれぞんまでよきあ貳
分ぞかうゝしておいそうるやこれぞまろてい
るハでうきぬゝう 十四 於ちんあるゝぬゝハよくどくづ
くぐゝぬ。 五ノ てきぐゝあいぐゝよあもあどよ
うとハよりおとしてのいるとあぐゝみゝぐゝいを
ぐゝりうこうんぐゝんのりうりうのあぐ
まぐゝりみもうけうきまりりりりる男に
ぐ言ゝりあ氣なりなぐひよ言ぐゝまあ
しもたゝ言ゝ
ゝて傳業れ傳もよりあずりうきとんぐ

紀そこのねつぐんへはつまこれハ蔚
おしとさんへうこつる夜のむ
はつさふ

五ゥ コヲはんぐそをくと行としてうほと
八重ゥうのやりくりう 十五 さろいさうふう
ぐね 五ゥ 燒つぎの火うまんのちぐりさふ
ようそひんとするるハねへ神やあ今夜ハ
すりうおれぐんいれとも部てはんぐそを

てやうふ 十五 はんどさもうへはんぐさア燈とと
のす物うへ 五ゥ コヲ和たくよもぐかすぐあれぐ
りうさ事ぐでうさねへよりてうけ部
のぐまんぐるハテでうぐねきりうふとせ
ずとやうとくたうこれのねへむまれつさ
て三文乃くうんもぐかりうこぐりやすと
ふでいふりうぐりう大道で茱と賣ふふ
れのうこみすぐとれてもせうぐ入れ智恵

とゝふものゞ〻人形芝居の太刀打と云る
よりまるふさな袖〻大きなるゆびでゝりあるゆう
するかゝねつゝふ都合ゞなんば水犬のゝや
とゝふ髪形ときゝてもゆんひゝかどあるさん
ちゆくとゝるゝゝあい地ゞすいてへんゞぞゝれで耳
のゝとゞゞゞゞゞゞゞると智恵のねへ所とを
つゝんゝ塩さゝ町川岩へやるゝゝ銭ゝゝゞ
ゞ[次ナ]ゝいちもゝ銭ゝゝゞけとゝへておゝん

あんゝゝゝゝゝゞゞゞゝゝゝゝゝゝゞ智恵
のてきるふハぬーと黒燒ゞのーてゝれとのんゞ
ちゝゝゝふがねゞふゞ智恵とゝゝゝこゝん
すゝゝするとかゝゝゝ男ゝゝゝゝゝゝゝで
もさゝてゝんでゝゝゝす[五ノ]何ゝゝおゝとゝゝ
ゝのゝゝ男ゞどんなゞゝゝゝゝゝゝゝゝ
の使ゝんゝゝゝんゞゝゝゝゝ其ハゝゝゝすき
ゞ屬ゞゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ[五ノ裏]ぬ

ハんうけよゝ物へうろそ〳〵ちゝぶぬく
かげんよゝあなんゝそゝがよりゝすめへ 芙蓉堂 すね
ぎぬさんわちくでいあゝゝかけんよちん
よ 勝れたる所 すね ゝや、やよそれでもれそどわハ
あゝそゝだりさがぬりふく大ちやさくさ
[ちゝ] なんぶけすゝそぎめゝうぬよわちく
のちやさくのと嵐ぐ米櫛とかちゝ志めし
なんが玉屋のせりぬと小耳にひゝそんでも

うゝよゝそゝまゝれゝくなるとのゝて
ゝおりゝくわちゝのちやさくのと
唐蜀黍 ゝふゝそゝくゝゝ冬ちゝまゝ芋と賣と
ゝふさんがびんがゝやゝさいるやゝゆやよし
やなちゝわぢんてへてんちゝとなつふゝよ
腰ゝゝめゝちゝれ淺ゝしやゝ里ゝゆゝゝ
ゝゝぢゝ取組ふとおりゝば千ゝ観音へ
ぢゝらとゝてぢゝそゝと三年もゝみ三谷の

昆沙門堂百足と後見まがのんでもまさ
おそるゝ［六ナ］それぞかゝるを組ねゝゝて
じやうねゝ［四ウ］ぞうまつじやとゝふね
まぐさ［五オ］まぐさ生世のオぐよりまもおゝ形
ぐれ［五ウ］なりて生世も紙ぐつよひ火口売のて
んびんよ苦売の杖で地獄へゝゝゝしみとう
まよらうとゝふてゝゝでらねふゝゝまおり
寺僧文ちやはやまつてまはゝうんしと

ゆへゝはごさなくゝれとかゝゝらふ［五オ］ねゝハ
まゝ代ゝ一向なな仕事の者よまぐれとざ
なゝゝふゝへ［五ウ］なんぐ山女ゝゝまゝれるぜ
よやたゝへ惣菜のゆゝめよ百ぐ梅漬と食
つゝ五町まち中へ黒飛の糞をたれそもも
ゝゝゝふゝゝぐなるをものうへ盲虫とハつぐるぐ五
郎ななぐのまへでいちゝとハしようけゝゝゝゝの
とおきさまつゝでゝゝやれるぐおれとゝゝ

あるわたくしどのようなる物りの世の中さくよりの
ごようのあるばかりのハ箱根の関所でふ
さねさんざとうさ【すね】さくこといのうの花ぞさんお
さくはんしへあるうへざけとのがでいすとさうろ
そ家味がうるうごさんすよ【ろう】とんかやく乃
迷惑がとろうてんのお傳馬よのうハしめへし
そふぬりくするのハねへざけとものがうとへの
うそうるわ紙づらしやんなるのうねがざけ
をのこゆいうこいふ物ぎうひとうでもひと
くるいてゑるるおんの人間のやうとして
ゆごるは物りるぬぐうおれなればこそおんぐう
してえ六ちびもさそやのうちりかう男めよび
そじ絵のよびおさ絵とおりや仏で法でもと
めいてもとうゆげハねへざ図【ゆ】がんよめしめるふな
きゆくじんうきさうつやらねをちうげおちて
ゆうこうう役ぶへもでくやくしとづわんよがうしいる

さぞ淋しくなれどなせる間がてへせん淋れるふ
仮まどもつて淋しくこまるを
平地は出行は時会ともまさせんうさきさ
もとせんとハおもへども毒殺ふ見のしやまされ
バ今ハむかしくろうと深入ぐ始めと目
見え白砂土之義へ月のけうるを夜のあかるとお
もひさをいうつげる若い者をおこつ戸をの
けさせ表へいづると大うん〳〵

序

世界ハ大見勢客ハ三十一二甚ふ要者ハ深の
ゆる新世界も方まへうて如何ある通人
通方ハ中三〳〵ハ十七八〳〵風俗小町〳〵
ちのけうて一体殷明うて張強情深さなれも
まこと〳〵ものおがこ氣うて世客を嫌ふすい
うんうさ〳〵杉並隣殷義うて発吉うやす

合雪の夜中の情〳〵てまうてハ陽てこいと

ちく桃と松葉と新いどのつるさの透間うゝゐれ
邪間どする夜なの風と雪とりくをかけ合おふ
て動も恵とうちこして実こりゝ冬の庶
チヤンヤヤく 一重 きさんじおとものざれコウくれちやちだ
しれう筆とうりていろさとつるさでおかるくまさ外
山さんさちふちやくとうてきも 吳茶 ゆのね外山
さんうおんせいすごやんなんゝたいさゝまふり
いゝさまふりておろうりゆふゝいゝさおろう

ぐふおすとき 一重 さろいぶをれうふるねろう
終ぐうなぜは灯ろうなるぐのふけぐ新する 客文重 ぐふ
ぐゝくう 一重 ぐやもちいさんのさ 文重 をれでもおう
ゝおうんつきぐぜ 一重 生れつさでおすりのを
文重 そのうふまいうぐとものとぐちふてゆいをぐ
うゝとやゆんて一ツ呑ハぐぐ新ぐをれうあぜ 一重
ゐうくゝハすぐうんまとのといまれをはうぐ
さんておうゝいやんぐやゝうんぐもうんとものと

いるがよいてあんなん〜 文里 こうもやこうもいで
成程十七八の時分はおつくしゆへてのにこうも
なんでもねへるすよそうとうとのよまはく
ぶつかるもさうぐいそうもーはとひうあぜ羽
織でもきていれハ〜
こういけよいうそうれ都そうてどゆうこう
かーはもゆへざれば都と部をよさくみ乃
かきをこのふハ筆のとがさぶけ紙とり裂

障子ゆうこう立いりうれてこもうひ出
一申三一重ゞ婦女郎九重ハ障子となり
て見ておやといりさぞうこうて近と振へ
り廊下をとうる蝶蝶とび
九重 こんなくよりはさんよ文里さんゞおいてなんー
さうこうおうこうセりかーいすとうろてくうあ 文里
おへんさなくまちるとてうそういうそがー
いるゆざの 九重 けようにうなぜ出ハおいてあんせんへ

ひるゝよりのさんやたれうとうとしていと
さおめへさんこそいそがしいこんりさね 文里 ヲヤ おも
れもいそがしいかるさるれども浮世のうふませ
ゑられてこそやうそうあるさか
おしゝと故蝶のもゝせまわどかくこれまろう
やすき中三
吉野 ヲヤ文里さんよりおいでなんしさちぜえしく
おいでなんせんとうんをまちまちよてうとうさだ

うしておりいしさわんまうちとしさそのう
いつのだろういつて九重さんようもちもせておんな
ちんしさこのひとゝえんさんときいてくおうんちんし
ぎくどもおいなどゝもゝ思へ部としておりいすと
お 九重 ヨムちよさへぶんまうさ 文里 おんまうそよ
もものうふよいつてくれいがかゝれいおんまあさ
ちとよるとおめへぐさのうちうさだうしてうよ
ちの ゝゝかへとせゝさんす 文里 おめへぐさとまく

いふもだちがねへとるまいが【よしの】らんまんはんへしまうさ
文里さんのせどがえんじまつてサア久しぶりだぐ
ねげへせう【文里】まづおやせんませう【よしの】そんなら
九重さんお頼いまあすあのこゑのかしいます【九重】ひとつ
たへいせうねさんお桜野さんりはなりんぞのはさざう
さく出す花さんがついで自分で見てる、いくらく一ッつぎやな【文里】おめへがさ
ぞふゆふゐんさこふとてちやすくみへもすてくさ
おしてくれるうはんそおめへがのすきさそうなら

そのとしかんが今てつけてくさるがアノ忠七はおあ
ありてなさそ客そのごやアそのしえ
でぎんすね 間もなく茶屋男忠七八ツくちさらせするつる【九重の】そうかまさよ【忠七】はいさよ
おまちなさでござりませう はいまく客人がおち
ねいましてかいぐさりこみおかさまもなとも
こましく【文里】よしくまち一ッのまねへ【忠七】ま
いねとものとまいでまいってゆうりはとくだ
きまそしてそありく【九重】よしのさん今のおねいとは

げいや〳〵 [りの] 文里さんはげりふきいすのへとりけり
[文里] さうなるぞさ〳〵かまいおくせへぐ [吉野] さうち
やアいやいや出だりければ [文里] のるく〳〵いあ〳〵
ねとぢいさねへぐこんやはさけの旬ひとかぐそ
いやぐ〳〵さ [りの] そんけりまねりふ一つうけいやさ
うだりぐんすねね [文里] ふさぐ〳〵さアく〳〵あれ
よかまるぐとたべ〳〵くんな [りの] そうやうう〳〵
ぐんすねねのひとへさんはぐまるんしねね [文里]

いまそうなるぞ [九重] それでもかんぞんのとちなる [文里] を
ふりて迎ふふと知りり〳〵 [九重] そりいうる九た
ねぐんや夜はようのさんもうるそ〳〵もて〳〵どて
かく〳〵ひ出されるまでおりいすぐ乳さ [文里] ちあ
そうるやうれしいぐ一つ〳〵みるこ二つ鏡ぞアねへくん
[九重] うそいさ〳〵いさ [文里] そんな〳〵たべてられねへ
けりやアぐ乳ぐすねねへ [九重] 文里さんも出し [文里]
そりちよかまるぐ〳〵 [九重] けりぐ〳〵さのふ

扨此二階中ちよきちよきおゝくわれても皆こゝろやす
けれバくるわれバ入るわり障子越の座敷ふ
さうけるわれバそれちらと咄す有けりとよ
みへたりくかぎりもなく傾城ながくやハ旦の女
まで爰ふいろくわれさまを繁くまさねう
らさねばハわるさしがくございんじの者う
とハたいがひまござりしと略さてハよ四五人おりて
【初編】文里さんハ甘ぜたへなんせんへ【文里】なんでもいや

さ【よすの】おまへはソレそのよふにけげんさんでござんせんかへ
ら翫のいろもつまらいふうでござんす【よつの】むりよ一ッ
のみなんしな【文里】ぞふぞおやまりと【九重】まお
アノひぢやさんハ何としてゐるこれさね【文里】ハテ
まあ川うらが花まるまるがつぼみひらきぬう
ちのたのしさき【九重】それでもおんなのうとりとめ【文里】
おめへがかけるも花が散るまでおまへのよふな
わの子のこねへうらおめへがとこはまへなりておとこ

てんすがのるうなずるをしめてくれちやうら
らみてくるど 九重 ぜんのうだら氣よかうゆすゑ
加藤 何ぞんすきゆくおさうセぜんし 文里 イヤヨ
おめんぐくもあのてるをやり一ぢ元さんかるくく
いやあればこそもうくんくくあるうらもも
ほどぐるのさ就をみせるるぬへよるい
をくるまこうべんくくるるぬんまう 知恵 ちえ ぐ
ぬへと知りかるるかこめへくくとくくびら知と

ゑれどもけれよおのへぐくさぐさうやをくして
ゑれるぐうれしさまくハぬのもまぐくく
ぐいいぬへうくさずいくうふておりへぐるくさ
れるるハぜんくおりるぐあるへぐくさのめへだぐ
人のうみよりのの人よゆびとされぬくあ 指
よおぬへまゆなくぬぐ一ぢ元さんのうまよく 欲
ぐあくつてハひ弟よ身づまうるぜうふと
ゆくすへぐおりひすごしぐおられてゆんぐら

れるこゝこん夜ハ新あさつゆすハ朝あさつゆと
おりかぶせよふあるものとゆ
ろうとおりけてつるひてつるものをハものよ
ふよおりかぶおりアリ所をのこしてまゆのそれハともの
れてふくしく来るとつるゆ隠ぐろふとおつ
てつの見とろうこゝろこめくとおりふぐとで
おれがいりちやアゆのこのものをめるなるめくろ
九重さんハ格別のるぐぐおめくぐもぐ

ろく苦界のいろはけをうてれのおるよ
ふよ見とーてやりてくるをくれぜこれ
でりふおりひのこするハゆくぐんやぐはこ二階
のいろはぐひぐとおりくハぐるなゆぐおれるあろ
さとこおりろと用こぐすこうふくしくまろやすく
ことのぐろくこゆくとうてもとーつきやい
でくくくいろ階までくるくハまと
のりふよころやもろゆてくんるよと

へど通答ゆるざれども九重殿
さいでもの嫁さんとかんじゃうおのひ
ゆまりてなきあぐらひとえとともかく家
ゆがなまて

九重 おりゑゆるれけんよ 【ト入】 ヲヤかんで申す

九重 ゆるぜ文里さんいろ
いまりてきいておりいしさが文里さんのさて
ちゆがかるいもので遠てぐらおりいしさ

九重 おむろ殿さんいろてほうとそくとおりひく
すが胸がろだいよかろてのかされいせんいろ
てさうせておりんかんし 【おりゑ】 アイ 【ト】 すぐ
ゆりすいすがらくものがろかりかすぐおく
きなんせんとゆもくくおいでもなんす
れども二階中で一元をやぬとのまでがこ
ろやすくだれでもろくおりのあとのはさん
もおりません文里さんちりとゆがと申ひと

おめへさんハなんとも和のひなんせんがらんなが
まらぬふりしてゐるだろうといゝすそれ
よりよ御茶屋のまへもおらすとりとも
文里さんのてすゞらう人は志てやもなんすまま
いがそれぶけ氣の毒でゆりそふあことのでおかい
す 五九 まお文里さんをよぶをさハござんせん
くへそれぢやアすみいすめへよそしてよお
ふまんまでのしといへとのでだんす 一こゑうむさ ちりつねつてゐる

それでも胸がおもおめへがうつりいせうがねのよ
かよ深切な志なんすねどき地がわつく
つらく志なんすがついぞなにさとうちあん
しうすもなく今も今とていとゐごといひと
志なんしておれがこゝろゆとでもおめへがねん
まう氣ずいきうぬ病がうねんしるとえん
あなもたのてなんしこうあくされうるのハ
なんとも和のもいじらんな深切者さまくんが

ゆろふとおりひなんすう女郎めゝつぎつさ
いすまへなんよちゆと公界と儀礼をおも
りなんゝこふすゝいすもおりひゝすがゝ
でなんす 下えん そのまゝおりへさんでさらと
さゝしとおりつゝゝこうておりへんなんすとおも
へばゝそうれゝおすちんよ文里さんハ久人
しくおいでなんす間もゆゝしいるもゝく
つとゆんまゝくもおすせんゝ物前の苦労と

せぬも行やゆめのせ話もへだとおりひすが
なのやそのまゝよ係切まれるわでそれやや
でなりいゝんゝはいるゝゝしすりしでも
ゝつでもさぜんゝおへうるんすもへ行て
ハさのどくまゝいゝてこんどきなんす
さ時ハまゝ去いやゝとおりつても歌をこい
すとゝゝうゝゝゝなゝいゝんなゝさか
さゝそふゝとゆゝでおすせゝかんまん

ておくんなん〜 九重 ゆきれけへよそんるく
そふとそなんしと
てきしばたれもこれずらくと捨
まへ紙とものこと紙としるはさのとくて
ふまたちいで〜何んなくうかべば文里を
なぐめ一度の傷軍後ハ涙の袖時
雨下ことしてい むせうへり新うん合てハ
清水川〜名残と惜しむそのふぜいもば

しそんそのそのうよ清くしおも
へばかんは今文よ伝初ぬ三年の
思まそもかけぐへゆるよは恋ゆふに
しそのそまさう名残の初ぬれく
おそうに紅と胸せうまそのうへ
よは才のうへこれまでゆるのくこと
あくゆ赤までゆるのくこと
さなくあそけそんで濡ぶ家男

のゝやまりきれとそばらま氣も乱れ
うりてらまうしひさえがん底ま川と
ぎうりま浅ぬもばたざさへ表おけし程の
めよのふかまくも一程ハめしい浅前後と
まう川淋志川び文里ハよかく元と
まうせうおし
文里 そふきんなが名跡を惜んでくれるハおゝ
られしいぞさしげぬへがそれぢゃ有さらへ

ちれねへさうと嫁ひ新とうんもろく
らんなよそるかんまらふでらさうのね
へるぞられハいる顔おりひのさゆぞさゆ
くらちへかて
側まゆりおか茶碗まてま酌のまゝ酒二ッ
三ッごんなへりて江ハ湊のいと伝ごひ沁んと
するを一下えハねかねかれぬおりひ語ま
そうつき浅かもハ文里ハぬりきうおま

はくだい

文里 みやげんのかいそうはくしいぶこれなく
さてあの外のそのようなつぶてもゆる絵へぐたとん
おれてふまんまいやとおりかぶ客人がさても
おりんへのふすまてハ身のそ絵よりぬそ
ちんと歌とまんなせへまうさハまうしもも
ぬへがたてすいさ男ハまれもているかな男
の多くしは社若界ふものそと随筆

まんかいてけあかいい耳どさてへ
まさこんなのろひ白と何て氣よりい
ぐかんまんなと
たちゆれバ下えハ何とせんさもぐふぐで
しておうんなんしまんぐ社ハむせう
へう涙とおさへて初潮路ハ

潮路 これ文里さんこんやぐうハぐふぐいく
ゆのそよの胸もさうておうんなんて

文里 ハテぐ絵

てられていうこみぐさとそのふんをとり
おのおのうこ 初秋の句 すいぶんひとはあるひせん
う一ト えさんもはのようにすうこ 文里 ゆう
やア三年もうあさこのごうこまさうよ
はいそうぬうだるあ うのはんでさこく
しまぐうせうこのうこでさんす 文里
おめへぐさのようあようてられをやはよ
くうれも志免いう うのはんするふいせん

うれうぐんす うのの 九重さんへかいておいで
はんすうこしようともうせてうこぐを
はいせうこ
よあくいーこもうれをとうあおーこをな
おさめて床へはいるごひやうれうあ家
ぬやぐへ立くくる一ト えハ浪うあくとお
うこじけのあぐんすうこまうまも
捨ぐくを結よ成ーこれうんとなくく

座敷を立出る文里はうちとゝぬぎ捨て
帶くるくとしめてねぢこゝろ
居る所へ間もなくぞく〳〵と一ト人ぐ足音
こゝろはうしろへもきうへてゐる根
子よりてなぜで一ト人ハ眼ぶち泣〳〵
し泪をふきしみる紙をもよりじくと
ひねつても行る方さいのたりれば九毒
そゝよ床よ入ハしハんおちはけどゞ

氣よりゝハ文里ゝ胸何〳〵ゝてのやま
らんとのそいてゝ考へゝ物〳〵初會
の如くまそいまんとすれどゝもておを
ひくてはうりう格子まの格かぞれ
ハすゝやセッのゆけちゝりれば和りへき
りてもくとゝ入へどゝふゝへなく
今宵ゝをねバゝゝしてのれでゝてハか
へゝぬすて物りハまるをハさもせられ

なんとせんをきはりひしがはりひはうう
てかんまんして とうりさけばば文里
八目覚しうあすまて
文里 なんぶびりうしと振向たをこと
しきさ様がおこりのう 一ト元 時くのお
ちちちもうといさしはりひせんど
ふぞうんまんして 解 文里 これはゆうさ
まりさちとうりいるう今さんの口

歯よううてきうぬへがそのうまゆがう
うのとべんしてきさハあれがつちんけよ
一ト元 ちのようあるはのすなぞはのうあな
元でゆりさと切りへバうを死よちのお
つす今さが今さだうどので解知ハち
なんすめへと
兼而しうの経友利すてまちあく被
とロよへ枕へはのて小指とおうさ紙

よ包てゐげぶ

[下え]これまでのるいうんめんーてこそ

そこしておくんなんーと

れる血をぬすてふたぎこれん

をこそぐと歯をくいしめこてへてさん

てもぬへしハきんぎのさんへていごらし

ゆ文里ろてなげ出ー お面をうへて

[文重]いゝぬへさんなるものをゐばすーてく

れらふるこぶハきのねへハこれ今とハ公年ぶ

ゐるぬ母へゆどけねへ欲のねへるぶとおも

ふるるるるれもいとるがるるぶら

てかるりてこふつぶとい仕方をされてハ

りふうんきゆくまさるるこれすが物さ

い苦界とふことのハ錦の夜ゐ名よりまる

もこと一枝の辻君ぶるでもめんくのすき

でつとあするのハひとりもねへ親るるの

たゞへは身をと川めされとおりんばかびんさま
こゝずいさまも里の女しいとをかして
ぞようしば只一筋まつしでさつち
はおりまぬそゝなみず今はおりてあんの
なかるのくゝへるはかずくかれどされ
とうかでなぁしどゝいふのがちかづしさは
こゝでいるをどこへぞうりて金はしらと
ゝまわせ八一ト元八まづしきゝりげく

一ト元 いおさちゃくもならいせうそれもさく
しがんがうだも身とうらんでおりいすが
せらんて一ト元うんぶんしさをいけんするに
いさらんで八命はさゝしくおきうおすぜ
んと
いたいるもせまくる渡はなきてられい
ハどこへ飛ぬきしくりもやきられとお
りひつめん 一ト元 ぞふでもめしいとゝへどえん

むすぶ小声よて

文里 作戸[illegible]いておくるハ秋の嘯[illegible]すくなき今
げも蘇毛なくとちやもとらん
一ト元ハ今ハこれまでこゝぜんのうみそう
とういぶーすでにはやうく見へくるる
文里ハはもてくるれどもなりてこ
ろーてくと志ぼりはゆくるをのち
こ撃剣とうはげ口へふとはゆて 文里 おれ

ゝやまうる何も人死ぬとゝふ人聞てう
らめしげよ新うちまとう 一ト元 何も人
とハさこ人いせんぞふでらぐぞうれハ
せす赤果でゝ欲志いすうるぬるぶ
きるーてころーてゝ撃も乱れ九も
乱ー文里ハまるもぬぶんなく
文里 これさくうぐでうれさこれさ
ゝハなくまはくく新でもぬさあよさ

[illegible]
[illegible]すること

変なる[illegible]と[illegible]
連理木[illegible]
カアカア

自跋

二心助道とは。世間の人々の善事の[illegible]。右も九も銀世界。うぐひす鳥のまよひ事[illegible]。雪の梅ひよどり[illegible]場へ[illegible]是人心[illegible]。

さして言原へ入ぬ。そ。實の
通意と高雄の金言兩部に
て地獄ふするなり。此畫の足る
りと知るは。何そ。の聖解よ。況
ひ然ひかうん

大尾

い5418